

〈公募論文〉

「誤謬推理」章における自己意識について

重松 順二

はじめに

『純粹理性批判』(以下『批判』と略記)「超越論的弁証論」(以下「弁証論」と略記)の「純粹理性の誤謬推理について」の章(以下「誤謬推理」章と略記)は、「超越論的演繹論」(以下「演繹論」と略記)において論述される悟性ないし超越論的統覚を「カテゴリーのすべての綱目を通じて」(A403)認識可能だと考える合理的心理学の誤謬に対して批判する一方で、経験の統一の根拠としての超越論的統覚を自己意識によって確保しようとする章だと多くのカント解釈者たちは評価する¹。つまりこれに従えば、当章においてカントは、超越論的統覚そのものの自己認識を排除する一方で、超越論的統覚を自己意識により内在的に確保しようとしており、そしてその自己意識のなかで彼は「規定されうる自己(考える主体)」(A402)を「規定する自己(考える働き)」(A402)の現象として内官に与えられうる主体だと考え、それによりそれらを明確に区別していることになる(vgl., A402)。

確かに「規定する自己(考える働き das Denken)」は、その「客観」(B407)としての「規定されうる自己(考える主体 das denkende Subjekt)」を「カテゴリーの手引きに従って」(A344, B402)考えようとしていることから、それが超越論的統覚であることは間違いないであろう。しかし「規定されうる自己(考える主体)」に注目すると、こうした評価に従うだけでは不可解な言明がしばしば見出される。例えば A342と B400では「考える主体」即ち「考えるものとしてのわたし」は「内官の対象」として「魂」と称され、そしてそれは A351では「理念」だと語られる(vgl., B426)。さらに「超越論的弁証論への付録」節では、理念は、悟性ないし超越論的統覚に対して「卓越した不可避免的に必然的な統制的使用を持っている」(A644, B672)「認識の全体の形式」(A645, B673)と見なされている。無論、これだけでもとづいて直ちに、「誤謬推理」章における悟性と魂の間には差異が存し、魂を、悟性ないし超越論的統覚よりもさらに高次で働く統制的原理としての理念だと解することは早計であろう。しかし「誤謬推理」章の悟性と魂を同一視し、それと、統制的原理としての理念とは全く関係ない、と即座に断定することもまたできないのではないだろうか。

さて、詳細については本論中で論じるが、第1版「超越論的心理学の第4の誤謬推理に関する批判」(A367)(以下第1版「第4誤謬推理」と略記)において論述される自己意識は、超越論的統覚

1 Heimsoeth(1966: 79-96)、Klemme(1996: 285-289)、Smith(1992: 455-457)、城戸(2014: 75-101)を参照。もちろん各々の論者の解釈には相違が存する。しかし筆者が解する限り、いずれの論者も、自己意識における統覚の自己関係性には着目するが、その一方で自己意識が孕む差異性にはあまり注目していない。本稿では、その差異性を際立たせることを通して、カント哲学の根源的基盤に迫りたい。なお、第2版「演繹論」で論述される自己意識論は、論旨を簡明にするために本稿の本文中では取り扱わない。本稿注21参照。

が自らの働きを把持するという活動を表しているとは思えないし、そして「考える主体としてのわたし自身の表象」(A371)は超越論的統覚の表象ではないように思える。そこで本稿では、「演繹論」で論述される超越論的統覚を念頭に置きながら、「誤謬推理」章における自己意識を探究しよう。そしてそれを通して、カント哲学における根源的な基盤を別扱したい。そのためにもまず、本稿の第1節では、第1版「第4 誤謬推理」における観念論論駁の鍵となる現実的存在の直接的知覚と自己意識が、カントの経験理論を踏まえると不可解であるということ进行分析し、次に第2節と第3節では、それらについて、主に第2版「誤謬推理」章や『プロレゴメナ』の叙述に即して考察する。そして第4節では、「第4 誤謬推理」の課題を確認し、それを通して、ここまでの解釈の妥当性をより強固なものにする。

1. 第1版「第4 誤謬推理」における現実的存在の直接的知覚と自己意識の不可解さ

本節では、第1版「第4 誤謬推理」における観念論論駁の考察を通して、論駁の鍵となる現実的存在の直接的知覚と自己意識が、カントの経験理論を踏まえると不可解であることを分析する。そのためにもまずは、合理的心理学と蓋然的観念論との関係を確認しよう。

「超越論的心理学の第4の誤謬推理に関する批判」というタイトルにも拘わらず、デカルトの超越論的心理学ないし合理的心理学と超越論的實在論にもとづく蓋然的観念論との関係が明確に語られているのは、ただ次の言明だけである。

「ところで、わたしが知る限りでは、経験的[ないし蓋然的]観念論に結びつくあらゆる心理学者[即ち合理的心理学者]は超越論的實在論者であるから、彼らが、経験的[ないし蓋然的]観念論に対して、人間理性がそこから抜け出すことは困難な問題の一つとして、非常に重要性を認めることは、まったく首尾一貫した態度である。」(A372)

すなわち合理的心理学者は「それ自身としてわたしたちの外に見出される物」(A372)を前提する超越論的實在論者であり、それ故蓋然的観念論に結びつくのであるから、人間理性にとって「抜け出すことは困難に問題」に陥るとされる。

しかしこれはどういうことなのか。これだけでは判然としない。そこで第2版「誤謬推理」章における次の論述を併せて考えてみよう。

「この合理的心理学の体系においては、あらゆる思惟する存在体は、外的な事物から独立して、自らの現実的存在(Existenz)を意識するだけではなく、この思惟する存在体の現実的存在をまた(実体という性格に必然的に属している持続性を考慮して)[外的な事物の現実的存在なしに]自分自身から規定することができる。」(B417 f.)

この引用も踏まえると、先のA372の言明は次のように解釈できる。つまり合理的心理学者は、物自体として存在する外的事物の現実的存在を前提した上で、その「外的な事物から独立して」自己意識することによって、思惟する自己の現実的存在を証明できると考える。「しかしこのことか

ら、合理的体系における観念論が、少なくとも蓋然的観念論が不可避になる」(B418)ことは明白であろう。なぜなら合理的心理学者が、自己意識から一歩も出ることなく、外的事物の現実的存在を証明するためには、推理という証明方法を選ばざるを得ないが、しかし「与えられた結果から一定の原因への推理は常に不確実」(A368)だからである。したがって合理的心理学者は、外的事物の現実的存在の証明に関して、蓋然的観念論という、人間理性にとって「抜け出すことは困難な問題」に陥るのである。

これに対して、第1版「第4誤謬推理」の叙述によれば、カントは、物自体の存在を前提することなしに、そして「単なる自己意識から外に出ることなしに」(A370)すなわち「わたしの自己意識の直接的証拠にもとづいて」(A371)あらゆる対象を「すべて単なる表象と見なす」(A369)超越論的観念論の立場を選び、そしてこの立場から、「現象としての物質に対し、推理される必要なく直接的に知覚される現実性を承認する」(A371)経験的实在論を主張しているように見える²。

さて、第1版「第4誤謬推理」における合理的心理学と蓋然的観念論の関係、さらにはそれに対するカントの論駁の仕方を簡単に確認したが、カントの経験理論を踏まえた場合、ここで語られる「直接的に知覚される現実性」と、そこから一歩も外へ出ることなく「直接的に知覚される現実性」を保証する「自己意識」は不可解だと言えよう³。まずは「直接的に知覚される現実性」の不可解さから考察しよう。

「純粹悟性のすべての原則の体系」の章(以下「原則論」と略記)の議論によれば、経験的对象は、その現存在が認識されうするためには「知覚を、したがって意識された感覚を要求する」(A225, B272)だけではなく、「経験の形式」(A376)としての「経験の類推」(A225, B272)に従って知覚が綜合統一されうることを要求する。しかもその現存在は、直接的に知覚されなくても「知覚の経験的結合の原則(類推)に従って、若干の知覚と関連しさえすれば」(A225, B273)認識されうると語られる。つまり「原則論」の議論を踏まえると、知覚は、それだけでは対象の現存在を保証することはできないのである⁴。さらにこの問題を分かり難くしているのは、第1版「第4誤謬推理」においてカントは「原則論」の議論を十分に踏まえているということである。例えば A376ではこう

- 2 空間と時間の超越論的観念性と経験的实在性の関係(vgl., A28, B44, A35f., B52)を踏まえつつ、第1版「第4誤謬推理」の論述を読解すると、カントの立場は、あたかも超越論的観念論に基づいた経験的实在論であるかのようである。しかし本文中で詳述するが、カントの真の意図を考慮すると、それらの関係は逆である。本稿注16を参照
- 3 さらに言えば、そもそもなぜカントは「誤謬推理」章、特に第1版では「第4誤謬推理」において、思惟する存在者の現実的存在の認識可能性を誤謬推理にもとづくものだと批判するのではなく、外的事物の現実的存在に関する蓋然的観念論＝合理的心理学を論駁する必要があるのか、という不可解な点が指摘されるに違いない。これに対する本稿の解釈は議論が進むにつれて追々示していくつもりである。特に本稿第4節参照。
- 4 Caranti(2019)は、当箇所における外的知覚の直接性の根拠を「感性論」の成果に求める(90-92)。そしてそれにもとづき「『第4誤謬推理』の文脈における直接性は、時間的に、或いは空間—時間的に未規定的な(*in-determinate*)対象が、第三のものの媒介なしに心に与えられるということの意味する」(89 f.)とCarantiは語る。外的知覚の直接性だけに着目しつつ、カントの経験理論の範囲内でそれを解釈しようとすれば、確かにこうした解釈は説得力を持つであろう。しかしそこから、この「未規定的対象」の提示が「空間時間における『或る物(something)』の現実的存在についてわたしに告げる」(90)とまでは言えないのではないか。なぜなら、カントの経験理論によれば、感性的対象の現実的存在は「経験の類推」の原則によって規定されてはじめて認識されるようになるからである。

述べられる。「知覚から……対象の認識は産出される」が「そこではもちろん、対象がそれに対応していない欺瞞的表象が生じうる。……ところでこの場合に、誤った仮象を免れるために、ひとは『経験的法則に従って知覚と関連しているものは現実的である』という規則に従うやり方を行う」と。そうだとすれば、「直接的に知覚される現実性」ということでカントはどのような事態を表そうとしたのか。これに関しては本稿第2節で論究しよう。

次に「自己意識」についての不可解な点を考察しよう。本節冒頭の論述によれば、論駁の鍵として語られる自己意識が、デカルトの合理的心理学における自己意識とは異なるものだということが明白である。なぜならその自己意識は、外的事物の現実的存在を証明するためには「推理」という方法により、自らの外に超越しなければならないからである。しかしここで指摘したい自己意識の不可解さはこれではない。その不可解さとは、カント自身の立場から語られる〈自己意識〉(以下「演繹論」の自己意識と区別するために〈自己意識〉と表記)が「演繹論」において論述される自己意識ないし超越論的統覚とも全く異なっていることである。超越論的統覚は、自らの働きに由来する「知覚の経験的結合の原則(類推)に従って、若干の知覚と関連しさえすれば」外的対象の現実性を認識できる。この意味では確かに、超越論的統覚は、自分自身から一歩も外に出ることなく、外的対象の現実性を承認することができると言えよう。しかし超越論的統覚は、単なる「自発性の作用」(B132)でしかなく、それ故「若干の知覚」が与えられるためには、超越論的統覚とは異なる認識源泉としての感性の力を借りなければならない。これに反して〈自己意識〉は、そこから一歩も出ることなく、外的対象の現実的存在の直接的知覚を保証するとされる。それでは〈自己意識〉とは何か。これに関しては本稿第3節で論究しよう。

ところで、第2版の改訂に関してカントは、「命題そのものや命題の証明理由、並びに計画の形式と完全性において」(BXXXVII)は「絶対に何らの変更も加えない」(BXLII)が、「叙述においてはなお為すべき多くのことがある」(BXXXVIII)と述べる。そしてその上で彼は、叙述に関してだけ「合理的心理学を非難した誤謬推理の誤解を取り除くべき」(BXXXVIII)だと語る。これに拠れば、第1版「第4誤謬推理」における論述の不可解さはすべて叙述の仕方にその原因があることになる⁵。そこで次節以降では、カントの自己理解に従って、考察の舞台を第2版「誤謬推理」章に移し、二つの不可解な点を解決に導きつつ、カント哲学の根源的な基盤に迫ってみる⁶。次節では「直接的に知覚される現実性」を解明するために、当章で論述される「未規定的知覚」を考察することから始めよう。

5 Lorenz(1986: 130)は「誤謬推理」章の改訂において内容上の変更はないと解する。それに対してHorstmann(1993: 416 und 424)やKlemme(1996: 289-293)や城戸(2014: 87-92)によれば、カント自身の自己理解に反して、第2版「誤謬推理」章の改訂では、叙述上だけでなく、内容上の変更が行われている。本稿ではカントの自己理解に従う。

6 「わたしの外なる物の単なる表象」(B275)から区別される「わたしの外なる物」(B275)或いは「持続的な物」(B275)を証明することによって蓋然的観念論論駁を試みようとする第2版「観念論論駁」節に着目するとともに、第2版「誤謬推理」章から、あたかも蓋然的観念論論駁が完全に削除されているかのように見えることも考慮するならば、第2版「観念論論駁」節の増補は、第1版「第4誤謬推理」の欠陥を補うためのものであり、それ故蓋然的観念論論駁は「誤謬推理」章から「原則論」に舞台を移したという解釈が妥当だと考えられるかもしれない。実際、Smith(1923: 320)やKlotz(1993: 14)をはじめとして多くのカント解釈者たちはそう解釈する。もちろん、第2版「観念論論駁」節と「誤謬推理」章における観念論論駁とは密接不可分な関係にあることには筆者も同意する。しかし本文中で詳述するように、従来の解釈に従って、観念論論駁の舞

2. 「或るもの」の「未規定的知覚」と現実的存在の直接的知覚

「未規定的知覚」は、第2版「誤謬推理」章の注において次のように述べられる。

「ここでいう未規定的知覚(eine unbestimmte Wahrnehmung)とは、与えられた、しかもただ考えること一般に対してのみ与えられた或る実在的なものを意味しており、それ故その実在的なものは、現象としてでもなく、また物自体(ヌーメノン)としてでもなく、事実、現実的に存在する或るもの(etwas)として、そして『わたしは考える』という命題においてそのような或るものとして示される。」(B423 Anm.)

それでは「未規定的知覚」とはどのような事柄を表しているのか。「原則論」によれば、「若干の知覚」が「経験の類推」にしたがって規定されることによって経験の対象の現実性は認識可能になる。それ故この場合において、知覚そのものは未規定的であると言えよう。しかしこの知覚は「未規定的知覚」とは異なる。なぜなら「若干の知覚」はそれだけでは対象の現実的存在を示すことができないものだからであり、しかもそれは例えば、「引きつけられた鉄粉の知覚」(B273)のような日常のなかで経験される具体的な知覚であり、それ故「現象としてでもなく、また物自体(ヌーメノン)としてでもなく、事実、現実存在する或るもの(etwas)」としてだけ示されうるようなものではないからである。

ところで、合理的心理学者は、無批判的に前提する外的事物から思惟する自己を完全に切り離して、その現実的存在を自己意識だけで証明しようとするが、カントによれば、その場合、合理的心理学者は、個々の外的事物からではなく、外的世界全体から自己を完全に切り離している。だからこそ、合理的心理学者は「外的感官のすべての対象の現存在」(A367)を疑わしいと見なす蓋然的観念論に陥ってしまう、というのがカントの診断である。

これに対してカントは、外的世界全体の存在との直接的な関係を主張したかったのではないか。このように理解すると「未規定的知覚」がどのような事柄を表しているのかが垣間見えてこよう。つまり「或るもの」の「未規定的知覚」とは、「経験の類推」の原則によって規定可能であるような、通常経験される個別のかつ具体的な「若干の知覚」や「感覚」のことではなく、すべての外的現象の根底に存するが、それ自体においては決して規定されることができない「或るもの」に関係しているが故に「未規定的」と表現され、またそれと直接的に関係しているが故に「知覚」と表現されるものである。

ここで第1版「第4誤謬推理」の議論を振り返ってみよう。当節でも二つの知覚が語られていた。そのうちのひとつは、日常のかつ個別的に生じうる知覚である。しかし当節で問題なのはこれではない。これは、前述のように「経験の形式」に従うことによりはじめてその現実性が認識可能になるものとして「原則論」で問題にされている。さらに「経験の形式」は「蓋然的」観念論にも、「カントの」二元論にもともに関係する」(A376)という文言からすると、当節では、個別の知覚だ

台を第2版「観念論論駁」節に完全に移してしまうと、「誤謬推理」章で語られる、〈自己意識〉という、カント哲学における根源的な事態が垣間見えてこなくなる。そこで本稿では「誤謬推理」章に観念論論駁を位置づけつつ、〈自己意識〉という事柄に迫ってみたい。

けでなく、「経験の形式」がアプリアリな規則でありうるのかどうか、ということも問題にされていない。

これに対して当節で問題とされるのは、もうひとつの知覚、すなわちそれによって外的対象の現実的存在が「直接的に」承認される知覚である。しかしそのために選ばれた「知覚」・「感覚」・「表象」・「現象としての物質」などという表現や「超越論的観念論＝経験的實在論」という自らの立場の表明が誤解を招いてしまった⁷。そこでカントは、その誤解を正して「理解しやすい叙述」(BXLII)のために「知覚」や「感覚」を「未規定的知覚」という表現に、そしてそれらによって現実的存在が承認されるものとしての「表象」や「現象としての物質」を「事実、現実的に存在する或るもの」という表現に書き換え、加えて自らの立場の表明を控えたのである。

以上の考察から、「直接的に知覚される現実性」という文言の不可解さが少しだけ解消される。再述すると、第1版「第4 誤謬推理」の論述では不可解であった「知覚」や「感覚」とは、「経験の類推」の原則によって規定可能であるような個別かつ具体的な「若干の知覚」や「感覚」のことでなく、すべての外的現象の根底に存するが、それ自体においては決して規定されることができない「或るもの」の「未規定的知覚」のことである。

それでは、この解釈を踏まえるならば、そこから一步も出ることなく、「或るもの」の現実的存在の「未規定的知覚」を保証する＜自己意識＞とは何か。そこで次節では、主として第2版「誤謬推理」章と『プロレゴメナ』の叙述を手がかりにしながら、「演繹論」における超越論的統覚ないし自己意識とは異なっているように思われる「わたしは考える」という命題を考察することを通して＜自己意識＞に迫ってみよう。

3. 「わたしは考える」という命題と＜自己意識＞

「未規定的知覚」によって「事実、現実的に存在する或るもの」が「ただ考えること一般に対してのみ」与えられるということが、これまでの解釈を通して仄見えてきた。そこで、「或るもの」が与えられる側である「わたしは考える」という命題に目を転じると、B418-430及び Anmerkung B422-423では、「演繹論」における統覚概念とは異なる規定が見出される。それは例えば、「与えられたものとして、すでに現存在(Dasein)をそのうちに含む命題としての『わたしは考える』」(B418)とか、「統覚は何らか実在的なもの(etwas Reales)である」(B419)とか、「『わたしは考える』は、すでに述べたように、経験的命題であって『わたしは現実的に存在する(Ich existiert)』という命題を自らのうちに含む」(B422 Anm.)というような規定である。ケンプ・スミスが指摘するように、こうした規定によりカントは、統覚概念の「通常の術語法から完全に離れて」⁸いくように見える⁹。しかしその一方でカントは、超越論的統覚について「通常の術語法」に合った仕

7 「ゲッチェンゲン書評」におけるGarveとFederによる当時のカント批判はK. Vorländerの校訂した『プロレゴメナ』の付録を参照。I. Kant, *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik*, Philosophische Bibliothek, Hamburg, 1969, S. 167-174. また、本稿注4におけるCaranti(2019)のような解釈も、カントが憂慮した誤解に含まれるであろう。

8 Smith(1992: 330).

9 Smith(1992: 329-331)やAllison(1983: 286, 288-289)やAmeriks(1982: 72)は、こうした統覚の新たな規定に

方で「思惟することは、それだけで見れば、単なる論理的機能であり、それ故単に可能的な直観の多様を結合する自発性に他ならない」(B428)と論述する。つまり当箇所においてカントは、超越論的統覚について、恰もその現存在を認めるかのような主張をする一方で、自らの経験理論に適った仕方ですれを語る。これらの論述はどのように理解されるべきなのであろうか¹⁰。

これほど不可解であるにも拘わらず、「わたし」の現実的存在に関する論述は、第1版では、A367や他の箇所(ex., A342f., A355)で散見されるが、纏まったものは見出せないし、第2版では、纏まった記述は見出せるが、それに関する主題的な取り扱いは見出せない。そこで、当の問題に対する解決の糸口を見出すために、第1版(1781)と第2版(1787)の間に出版された『プロレゴメナ』(1783)を検討してみよう。

『プロレゴメナ』第46節「I 心理学的理念」においてカントは、思惟する主体としての「わたし(das Ich)」ということによって、内官のすべての述語がすべてそれに帰せられる「対象、すなわち絶対的主体そのものが経験において与えられる」(IV, 334)という期待は裏切られると述べた後で、その理由を次のように語る。

「なぜなら『わたし(das Ich)』というのは、概念ではなく、内官の対象の表示(Bezeichnung)にすぎないからである。……したがって『わたし』は、それ自体において確かに他の物の述語ではあり得ないが、しかし絶対的主体の規定された概念でもないものであり、あらゆる他の[実体の]場合と同様に、内的現象の、その知られない主体への関係にすぎないのである。」(IV, 334)

つまり「わたしは考える」の「わたし」によって、「絶対的主体そのものが経験において与えられる」とわたしたちは考えるかもしれないが、しかし「かなり深くまで見通すわたしたちの悟性によっても、全自然が悟性に明らかにされた場合でさえ、実体的なものそのものは考えられ得ない」(IV, 333)。したがって「わたし」は「それによって何かが考えられる概念」(IV, 334 Anm.)ではなく、「内官の対象」即ち「内的現象の知られない主体」を「表示」するにすぎない。しかもそれは、超越論的統覚だけではなく、より広義の心ないし魂を表しているはずである。なぜなら超越論的統覚は、単なる論理的な機能でしかなく、それ故内官のすべての述語がすべてそれに帰せられるような主体ではないからである¹¹。

よって物自体が語られていると解釈する。

10 「考えるということに対して質料を与える何らかの経験的な表象がなくては、『わたしは考える』という働きもやはり生じない」(B423 Anm.)という言明に関して、Klemme(1996)は「思惟に或るもの(etwas)が、それ故思惟がそれに関係する『第3のもの』が与えられる場合にのみ『わたしは考える』という作用は生じることができる」(385)と解釈する。それ故Klemme(1996)によれば、当箇所カントは統覚を物自体として語ろうとしているというSmith(1992)らの批判や、カントによる自己意識の「反省理論は論点先取の虚偽に終わっている」(195)というHenrich(1966)の批判は当を得ない(Klemme 1996: 375-385)。この点に関しては筆者はKlemme(1996)に同意する。その一方でKlemme(1996)は「わたしの現実的存在」の「未规定的知覚」(B422 Anm.)に関して、それを、統覚自身の自己意識に帰せしめ、現存在する統覚が経験的或いは実践的に規定されうると考える(Klemme 1996: 376 und 385-389)。しかし、本文中で詳述するが、この点に関しては筆者の解釈とは異なる。

11 カントの内官の理論が難解だとされる理由の一つは、超越論的統覚の自己意識を一步も出ずに、「わた

しかし「内的現象の知られない主体」を「わたし」が「表示」ということは「かなり深くまで見通すわたしたちの悟性によっても」考えられ得ないとすると、それは何によって保証されるのか。

これに関しては、第46節に付された注に手がかりを求めることができる。

「統覚の表象、すなわち『わたし』というのは、少しの概念も含まない、現存在の感情(Gefühl eines Daseins)以上の何ものでもなく、思惟活動のすべてがそれと関係(……)を持つものの表象にすぎない。」(IV, 334 Anm.)

これによると、「内的現象の知られない主体」を「わたし」が「表示」することが可能になるためには、「思惟活動のすべてがそれと関係を持つ」「内的現象の知られない主体」の「現存在の感情」によって保証されることが必要なのである¹²。

このことを踏まえると、「わたしは考える」という命題が現実的存在を含むということの意味が仄見えてこよう。つまりそれは、思惟する自己がそれ自体において現実的に存在するというだけでなく、「わたし」は超越論的統覚を表し、それが自らの働きのさなかに自分自身の現実的存在を内在的に把持するというでもない。そうではなくそれは、「わたし」は「内的現象の知られない主体」の「現存在の感情」を表しており、それ故「わたしは考える」という命題は「それだけで見れば」「単なる論理的機能」にすぎない統覚機能を含む「考えること一般」が「それと関係を持つ」「主体」の「現存在の感情」を、つまり「わたし」の現実的存在の「感情」を「自らの内に含む」ということを表しているのである。

さて、いま見てきたように、『プロレゴメナ』第46節は「心理学的理念」を主題としており、ここでは「心理学的理念」に関係する限りで「わたしは考える」の「わたし」が論述され、その結果、「わたし」は「内的現象の知られない主体」の「現存在の感情」を表象するものとして語られる。ところで、その一方で、第2版「誤謬推理」章を読解した本稿第2節の考察では、「わたしは考える」という命題は「考えること一般」を表し、それに対して、すべての外的現象の根底に存する「事実、現実的に存在する或るもの」が「未規定的知覚」により「すでに与えられている」ということが示された。

これらを併せて考えると、「わたしは考える」という命題は「わたし」と「考えること一般」という、二つの不可分離な契機から構成されており、それらを敢えて別々に捉えようとすると、「わたし」という契機に関する限りでは「現存在の感情」によって、すべての「内的現象」の根底に存する「知

し」によって「表示」される魂を超越論的統覚と同一視するからである。つまりその場合、内官に与えられるはずの「わたし」の多様は存在しないことになる。Allison(1983: 259)、Klemme(1996: 221-226)そしてPaton(1948: 233)を参照。

12 この「わたし」は、「私たち」の言語的コミュニケーションの中で、通常「私」という一人称代名詞によって指示されるものでもなく、また純粋な自発性の作用そのものでもなく、むしろそれらの存在論的前提として「全自然が悟性に明らかにされた場合でさえ」悟性によって考えられ得ない「内的現象の知られない主体」を「表示」するのである。また「感情」という側面に関して言うと、「近代哲学史上、頻繁に登場する思想であって、むしろ陳腐にすぎる」(城戸2014: 145)と城戸が評する近代哲学における自己感情論と本稿によるカントの自己感情論と自己意識論の解釈との異同についての検討は稿を別にした。

られない主体」がすでに与えられているということが表示され、「考えること一般」という契機に関する限りでは「未規定的知覚」によって、すべての外的現象の根底に存する「或るもの」がすでに与えられているということが表現される¹³。したがってそれらを「自らの内に含む」「わたしは考える」という命題が表現する「未規定的知覚」とは、感性と悟性による客観的認識の構成に先立ち、その現存在が感じられているとしか語りえない「主体」がその外に存在する「或るもの」の真ただ中にすでに投げ込まれているという「感情」ないし「知覚」を示している¹⁴。

ここから<自己意識>の姿が仄見えてくる。「わたしは考える」という命題は「わたし」の現実的存在の「未規定的知覚」を「自らのうちに含み」かつ「考える」ということを、すなわち<自己意識>を表現している。そして再述すると「わたし」の現実的存在とは、すべての外的現象の存在根拠としての「或るもの」と直接的かつ不可分離な関係を保ちつつ現存在しているという「感情」としてしか表象されえない「内的現象の知られない主体」のことである¹⁵。したがって「わたし」は<自己意識>を一步も出ることなしに「事実、現実的に存在する或るもの」に関して「推理される必要なく直接的に[そして未規定的かつ経験的に]知覚される現実性を承認する」ことができ、そしてこれにもとづいて、あらゆる対象を「すべて単なる『わたし』の内なる」表象とみなすことができるのである¹⁶。

またこれを踏まえると、「わたしは考える」が「経験的命題」であることの意味はこう理解できる。つまりそれは、「この命題における『わたし』が経験的な表象である」(B423 Anm.)ということではなく、「考えること一般に属するが故に、純粋に知性的」(B423 Anm.)である「わたしは考える」という命題が成り立つためには、「未規定的な経験的直観、すなわち知覚」(B422 Anm.)によって、そのうちにすでに「わたし」の現実的存在が与えられていなければならないということである。

13 第1版「第4誤謬推理」の後半部では「わたしたちには知られない現象の[存在]根拠」(A380)として「外的現象の根底に存するとともに、同じく内的直観の根底にも存する超越論的客観」(A379 f.)が語られている。本稿の解釈によれば、これは、第2版の改訂により「わたしは考える」という命題として表現し直されている。これに対して、第1版「演繹論」のA109で言及されている「超越論的对象」は、客観的認識の根拠として提示されており、それ故それは、「わたしは考える」という命題そのものをではなく、その内に含まれる一契機としての超越論的統覚ないし悟性の働きを表している。本稿注16と21参照。

14 『批判』第2版の前年に出版された『自然科学の形而上学的原理』(1786)のIV, 542-543では「わたし」は「現存在の感情」ではなく「単なる内的知覚」によって示されている。

15 「心的歴史を持つ人間」と「歴史を全く持たない超越論的統覚」との同一性をカントは説明することはできないとStrawson(1966: 247-249)は批判する。これに対しカントは、それらの同一性の結合点を「わたし」の現存在に帰するであろう。しかし理論哲学では、この「わたし」は「内的現象の知られない主体」の「現存在の感情」を「表示」・「表現」するに止まる。それ故カントはStrawson(1966)の批判を甘受するに違いない。

16 こうした立場は、第1版の術語を使うと、経験的实在論にもとづいた超越論的観念論だと表せるであろう。これは、空間と時間の超越論的観念性と経験的实在性の関係に矛盾するように思えるが、しかし前者は現象の存在根拠についての、そして後者はその認識根拠についてのカントの立場を表す。これを裏づけるように、『プロレゴメナ』においてカントは、現象の存在問題についての自らの立場を、超越論的实在論とは一線を画しつつ、「観念論の反対」(IV, 289)の立場であることを表明し、その上で現象の認識問題についての自らの立場は、誤解を避けるために、超越論的観念論=経験的实在論ではなく、「批判的観念論」(IV, 293, 375)ないし「形式的観念論」(IV, 375, B519)の方がより適切な表現だと語る。

4. 第1命題としての「わたしは考える」と「第4 誤謬推理」の課題

本節では、ここまでの考察を踏まえつつ「第4 誤謬推理」において本来論じられるべき課題を確認する。そしてそれを通して、本稿の解釈をより強固なものにしよう。

本稿の「はじめに」でも述べたように、「誤謬推理」章は、超越論的統覚の総合的認識が可能だと考える合理的心理学の誤謬に対して批判する章だとカント解釈者たちの多くは理解している。この理解に従えば、合理的心理学の「唯一の主題」(A343, B401)としての魂や「わたしは考える」という命題は超越論的統覚を表しており、それ故、超越論的統覚としての「考えるという働き一般の論理的研究」(B409)によって正当に推理されうる、超越論的統覚の実体性・単純性などという「必然的命題」・「同一的命題」・「分析的命題」(B407)を合理的心理学者がそれにより「誤って客観の形而上学的規定」(B409)と考えてしまう「超越論的誤謬推理」(A341, B399)を、カントは「第1 誤謬推理」から「第4 誤謬推理」までにおいて暴露していることになる。しかしこうした理解に従うと、「第4 誤謬推理」において、それが「誤って客観の形而上学的規定」と考えられてしまう「分析的命題」に関して不可解な点が生じる。

「第4 誤謬推理」は様相のカテゴリー、特に現実性のカテゴリーに対応しており、それ故従来の理解に従えば、当節においてカントは、魂ないし超越論的統覚そのものの現実的存在への誤謬推理を暴露するはずだと予想されるに違いない。しかし「第4 誤謬推理」では、魂そのものの現実的存在ではなく、魂と「空間における可能的対象との関係」(A344, B402)が問題にされ、特に第2版では明確にこう述べられる。

「わたしは、考える存在体としてのわたしの現実的存在を、わたしの外なる他の物(それにはわたしの身体も属する)から区別するというのも同じく分析的判断である。」(B409)

つまり「誤って客観の形而上学的規定」だと推理されてしまう「分析的命題」は、「第4 誤謬推理」においては、魂の現実的存在そのものに関してではなく、魂とその外なる事物との相互関係に関するものになっている。

それでは、これによってカントは何を批判しようとしているのか¹⁷。本稿の解釈を踏まえるならば、カントの意図は以下のように理解できる。

本稿の解釈によれば、<自己意識>ないし「わたしは考える」という命題は、すべての現象の存在根拠である「わたし」の現実的存在の「未規定的知覚」を「自らのうちに含み」かつ「考える」ものであり、それ故そこにおいて個々の知覚が可能であるばかりか、「経験の類推」に従ってその知覚と関連しさえすれば「単に時間における『わたし』の表象に関して、『わたし』の現実的存在の規定可能性を含む」(B420)「わたしは考えつつ現実的に存在する」(B420)という「第1 命題」(B420)として「与えられたものと見なされる」(B420)。

17 Bennett(1974)は「第4誤謬推理は間違っただけで位置づけられているので、私はそれについてこれ以上語るべきではない」(72)として「第4誤謬推理」を「誤謬推理」章から排除し、Ameriks(1982)は「突然(Suddenly)、『純粹理性批判』において、『様相』というタイトルの下で)外的世界と魂との可能的関係についての問題を提示するために、魂についての彼の取り扱いの構造を変え、そして破壊さえした」(109)と批判する。

デカルト流の合理的心理学者は、こうした魂の根源的なあり方を忘却しつつ、魂そのもののを、「それにはわたしの身体も属する」外的世界全体から独立して、或いはそれなしに(vgl., B409, B418)、関係のカテゴリーから出発し、質・量・様相の順番に推理することによって(vgl., B416 f.)、魂の実体性・単純性・同一性・現実的存在を「総合的関連において」(B416)証明できると考えた。これに対してカントは、周知のように、「第1 誤謬推理」から「第4 誤謬推理」まで、合理的心理学者の順序に従って誤謬推理を批判する。

しかしカントによれば、合理的心理学は、本来あるべき学の方法として、「与えられたものとして、すでに現実的存在をそのうちに含む命題としての『わたしは考える』を、つまり様相を根底におく分析的方法」(B418)に従って「思惟する存在者一般の概念からではなく、現実性から始め、そしてそこにおいて、『それにはわたしの身体も属する』外的世界全体や、それにもとづく、外的なものとの内的なものを含む『わたし』の表象¹⁸のうちの経験的であるものすべてが除去された後で、[それでもなお『内的現象の知られない主体』として感じられる]この『わたし』の現実性が考えられる仕方から、思惟する存在者一般に属するものが『分析的命題』として導き出されるのである」(B418 f.)¹⁹。

以上の考察から「第4 誤謬推理」の課題が明らかになる。つまりそれは、「思惟する存在者一般」から、身体を持つこの「わたし」がその真ただ中に埋め込まれている外的世界全体や、それにもとづく「わたし」の表象のうちの経験的なものすべてを区別することは「分析的命題」であるということを示す一方で、その命題を「誤って客観の形而上学的規定」と考えること、つまり「わたし」を外的世界全体から存在論的に独立して規定することは「超越論的誤謬推理」にもとづくものだと批判しようとしたのである²⁰。そしてその位置づけに関しても、それは本来「第一命題」に置かれるべきものである(vgl., B419)。

おわりに

これまでの考察によれば、「誤謬推理」章においてカントは、超越論的統覚そのものの自己認識を排除しようとしたのではなく、また「演繹論」で論述される超越論的統覚を自己意識によって内在的に確保しようとしたのではない。そうではなく本章におけるカントの狙いは、第一に、デカルトの合理的心理学がそれに陥らざるを得ない蓋然的観念論の論駁を通して、「わたし」の現実的存在の「未規定的知覚」を「自らのうちに含み」かつ「考える」という<自己意識>ないし「わたしは考える」という命題をできるかぎり顕わにすることであり、そして第二に、この<自己意識>という根源的かつ未規定的な基盤が忘却されてしまって、そのうえで「超越論的誤謬推理」にもとづ

18 つまり直接的かつ未規定的かつ経験的實在にもとづく超越論的観念。本稿注16参照。

19 「誤謬推理」章でカントが批判するのはデカルトの合理的心理学であって、合理的心理学そのものが否定されているのではない。例えばA845-7, B873-5を参照。

20 これによりカントは、デカルト哲学における心身問題が消滅すると考える。例えばB427-8を参照。なお当箇所では「人間の認識の領域外に存する」(B428)難問が提起されるが、これは<自己意識>へのさらなる探究を促す問題であろう。したがってこれは、その問題性の解明も含め、今後の課題にせざるを得ない。本稿注22参照。

き、魂と外的世界全体が存在論的に区別されるならば、それ自体において存在する魂がわたしたちに認識可能だと誤解されざるを得ないということを示すことである。このことから、「規定する自己(考える働き)」は、合理的心理学を構成しようとする超越論的統覚を表すが、その「客観」としての魂ないし「規定されうる自己(考える主体)」は、超越論的統覚そのものではなく、それを含む<自己意識>ないし「わたしは考える」という命題を表すということが明らかになる²¹。

ところで<自己意識>そのものは、カント哲学がその規定を目指すべき根源的基盤として存すべきものなのであるが、しかし「全自然が悟性に明らかにされた場合でさえ」悟性によって考えられることができないものである。それ故、例えば超越論的統覚は、「わたし」=「魂」の実体性・単純性・同一性・相互性を「分析的命題」として論理的に研究することができるだけだし(vgl., B407-409)、また理性は、魂の「理念に従って(心理学において)わたしたちの心のすべての現象、働き及び感受性を、内的経験の手引きによって、あたかも心が単純な実体であるかのように結合する」(B700)ことしかできない。

このような、理論的には未規定のままである<自己意識>に関して、カントは第2版「誤謬推理」章の最後に、実践理性がそれを規定しようという見通しを与える(Vgl., B430-432)。しかし<自己意識>の規定に関しては今後の課題である²²。

-
- 21 本稿で別決された<自己意識>と第2版「演繹論」で語られる自己意識や自己認識との関連を少し述べておこう。例えば「表象一般の多様の超越論的総合において、『わたし』は……『わたし』が在るということだけを(nur daß ich bin)……意識する」(B157)という主張が意味していることは、本稿の解釈によれば、「わたし」は、自らの悟性活動のさなかで、悟性活動する「わたし」の「存在」だけを自己意識するというのである。この場合「存在」は、悟性の働きにではなく、「わたし」の現実的存在に由来する。しかし「わたし」の「存在」は、悟性活動の自己意識、つまり<自己意識>とは働く位相が異なる「自己意識の超越論的統一」(B132)によってだけでは規定され得ない。それ故、カントの経験理論において「わたしは存在する」という表象は「わたし」が悟性によって「思惟すること[の自己意識だけを表すの]であって、[[わたし]の現存在を]直観すること[を表すの]ではない」(B157, vgl., B135 und B138f.)。「もちろん、わたし自身の現存在は現象(ましてや仮象)ではないが、しかしわたしの現存在の規定は、内官の形式に従ってのみ、わたしが結合する多様が内的直観において与えられる特殊な仕方に従って生じうる。」(B157f.)
- 22 『判断力批判』「序論」第9節の第2段落(V, LVf.)では、悟性によってそれへの「指示」は与えられるが、しかし「全く未規定のまま」残される「(わたしたちの外なるものであるとともに、わたしたちの内なるものでもある)超感性的基体」の規定により「判断力は自然概念の領域から自由概念の領域への移行を可能にする」と語られるが、筆者は、この「超感性的基体」が<自己意識>を示しているということを今後の研究で顕わにしていきたい。

参考文献

1. 『純粋理性批判』からの引用は、慣例に従い、第1版(1781)をA、第2版(1787)をBとしてその頁数を本文中に記す。それ以外のカントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数字、頁数を算用数字で本文中に記す。
 2. 引用文中の[]内と傍点は、特にことわりがない限り、筆者による加筆である。
- Allison, H. E., *Kant's Transcendental Idealism, An Interpretation and Defence*, Yale University Press, 1983.
- Ameriks, K., *Kant's Theory of Mind, An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, Oxford: Clarendon Press, 1982.
- Bennett, J., *Kant's Dialectic*, Cambridge: Cambridge University Press, 1974.
- Caranti, L., *Kant and the Scandal of Philosophy: The Kantian Critique of Cartesian Scepticism*, University of Toronto Press, 2017, Reprinted in paperback 2019.
- Heimsoeth, H., *Transzendente Dialektik, Erster Teil*, Berlin, 1966.
- Henrich, D., Fichtes ursprüngliche Einsicht, in D. Henrich / H. Wagner (eds.), *Subjektivität und Metaphysik. Festschrift für Wolfgang Cramer*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1966.
- Horstmann, R.-P., 'Kants Paralogismen', *Kantstudien*, vol. 83, 1993.
- Klemme, H. F., *Kants Philosophie des Subjekts. Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis(Kant-Forschungen 7)*, Hamburg: Flex Meiner Verlag, 1996.
- Klotz, Ch., *Kants Widerlegung des Problematischen Idealismus*. Göttingen, 1993.
- Lorenz, G. H., *Das Problem der Erklärung der Kategorien. Eine Untersuchung der formalen Strukturen in der "Kritik der reinen Vernunft"*. Berlin/New York, 1986.
- Paton, H. J., *The Categorical Imperative*, The University of Chicago Press, 1948.
- Smith, N. K., *A Commentary to 'Kant's Critique of Pure Reason'*. 2nd ed., 1923, Humanities Press International, 1992.
- Strawson, P. F., *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Routledge Taylor & Francis Group, 1966.
- 城戸淳『理性の深淵－カント超越論的弁証論の研究－』知泉書館、2014年。